

編二第書叢明文

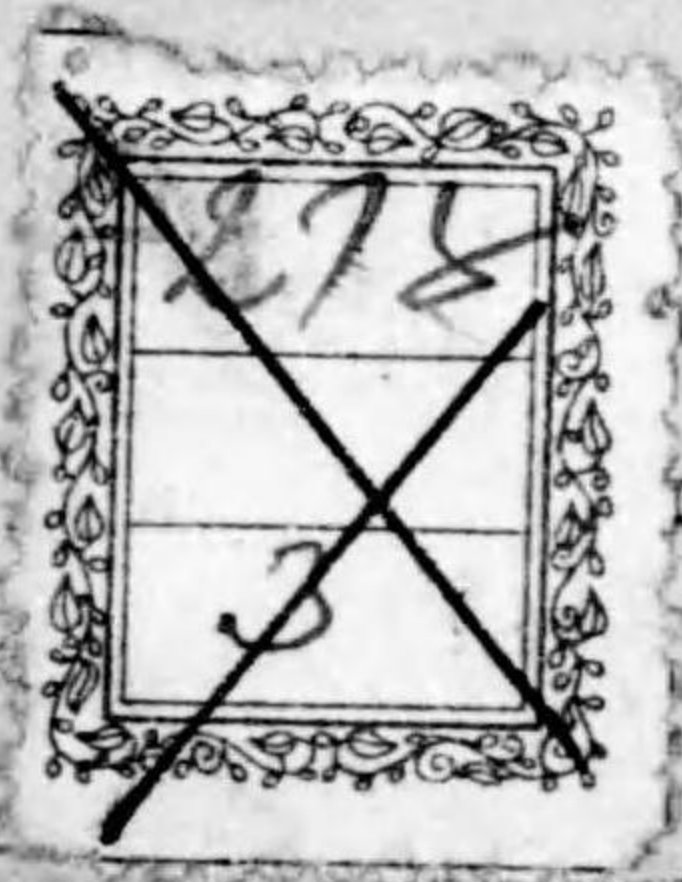
著ドルイワ

メオロサ

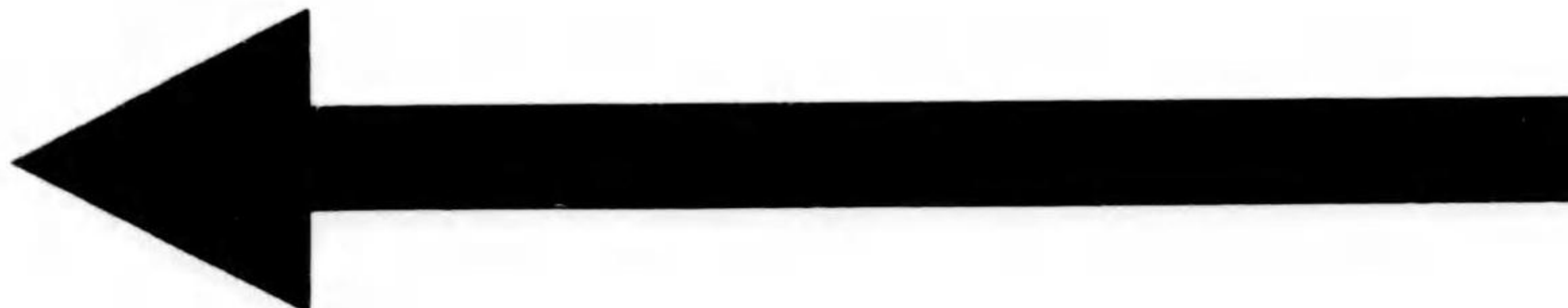
譯全

譯江長田生

特100
857



始



特100
857



文明叢書

第二編

大正
3. 11. 4
内交

文明叢書發刊の辭

獨にレグラム叢書在り。英にカッセル叢書あり。佛にネルソン叢書あり。皆世界百科の書を網羅し、内容の充實と價格の低廉と相まちてあらゆる階級の讀者に布過し、各國知識の開發者たると共に世界文明の指導者たり。而して今迄我日本に此の種の叢書の出づべくして出でざりし事は實に出版界の缺陷にして又實に吾文明の缺陷なり。小院茲に見る處あり、今や乃ち「文明叢書」の出版を企て、最善の力を之に致さんとす。希くば賢明なる讀者の深厚なる同情によりて、叢書の篇を重ねるに隨ひ、我が同胞の各戸に最も完全にして最も便利なる圖書館を建設するを得んか。

發行者謹白

サロオメ

オスカア・ワイルド作
生田長江譯

はしがり

これはニイチエの『ツアラトウストラ』の翻譯にそりかかるより一年半ばかり前、一九〇七年の冬頃に翻譯したのであります。テキストとしては、Boston: John W. Luce & Companyの一九〇六年版を用ひました。なほこのたびこれを出版するに際しては、Leipzig: Bernhard Tauchnitzの一九〇九年版や、レクラム本の獨逸譯を参照して、多少の訂正を加へて置きました。斯う云ふ種類の作品を、斯う云ふ文體の日本語にして見ようとするのは、勿論あの頃の私の趣味でありました。しかし今日でも、一寸面白い位には思つて居ります。

一九一四年九月十六日

生 田 長 江

悲劇サロオメ

登場人物

ヘロデ・アンティパス (猶太の王)。

ヨカナアン (預言者)。

若きシリア人 (衛兵の軍監)。

テイゲリヌス (若き羅馬人)。

カパドシア人。

ヌビア人。

第一の兵卒。

第二の兵卒。

ヘロディアの侍従。

猶太人等、ナザレ人等、其他。

奴隸一人。

ナアマン(死刑執行者)。

ヘロディア(王妃)。

サロオメ(ヘロディアの女)。

サロオメの奴隸等。

舞臺——ヘロデの王宮、饗宴殿につらく大露臺。兵卒等欄杆に倚る。右の方には巨なる段階、左の方、後手には、青銅の壁を廻らせたる古き井戸。月煌々として輝け

り。

若きシリア人。今宵はサロオメ姫の如何に美しきかな。

ヘロディアの侍従。月を見よ。さても怪しき月の有様かな。墓より出づる婦に似たり。命

なき婦に似たり。命なきものを求めてありしかとも思はれむ。

若きシリア人。彼女の怪しき有様よ。宛や、黄の面帕して、銀の足もつ小き姫、その足に、

雪白の小き鳩もつ姫にも似たり。舞ふてありしかとも思はれむ。

ヘロディアの侍従。命なき婦に似たり。いさ徐かにも行く。

(饗宴殿よりの物騒がしき音)。

第一の兵卒。そもく何の喧噪ぞ。何物なるか、かの野獸の吠ゆるが如くなるは。

第二の兵卒。猶太人なり。彼等は常に此の如し。其宗教に就きて相争へるなり。

第一の兵卒。何故なれば其宗教に就きて相争へる。

第二の兵卒。言ひ難し。彼等は常に之を爲す。例へば、パリサイ人は天の使をありと言ひ、

サドカイ人は天の使をなしと説く。

第一の兵卒。さる事共に就きて相争ふは可笑しからずや。

若きシリア人。今宵はサロオメ姫の如何に美しきかな。

ヘロデアの侍従。汝は常に姫を見る。姫を見るこそ過ぎたり。さばかり人を見てあらむは殆し。何等かの恐ろしきこゝ起るべし。

若きシリア人。今宵は姫のいさ美し。

第一の兵卒。王は浮立たぬ状に見ゆ。

第二の兵卒。さなり、浮立たぬ状に見ゆ。

第一の兵卒。王は何物かを見る。

第二の兵卒。何人かを見る。

第一の兵卒。何人かを見る。

第二の兵卒。言ひ難し。

若きシリア人。我が姫のいかに蒼白きかな。かばかり蒼白き姫を見しこそなし。銀の鏡に

映る、白き薔薇の影もかくや。

ヘロデアの侍従。汝姫を見るべからず。汝の姫を見るこそ過ぎたり。

第一の兵卒。ヘロデアは王の盃を充たしぬ。

カパドシア人。あれは妃ヘロデアなるか。かの眞珠もて綴れる黒き帽を冠り、其髪に青き粉を施したるは。

第一の兵卒。さなり。あれこそは分封の君、ヘロテ王の妻ヘロデアなれ。

第二の兵卒。王は太く酒を嗜めり。三種の酒を有つ。一はサモスレエスの島より齎され、皇帝の上衣の如く紫なり。

カパドシア人。我未だ皇帝を見ず。

第二の兵卒。また一はキプロと呼べる、町より來り、金の如く黄色なり。カパドシア人。我金を愛す。

第二の兵卒。さて第三はシシリアの酒。その酒は血の如く赤し。

ニユウピア人。我が國の神々はいま縦なり。歳毎に二度若き男と女とを、五十の若人と、
 一百の童貞とを之に献ぐれど、尙ほ献ぐるここの足らざるか、我等酷くも扱はる。

カパドシア人。我が國にはたゞひさりの神も残らず。羅馬人逐ひ出せしなり。逐ひ出されて
 山に隠れぬと云ふものあれど、我は信ぜず。我逐はれぬと云ふ神々を山に尋ねて、三
 の夜を明しぬ。何處にも其影なかりき。遂に其名を舉げて呼びけれども來らざりき。
 死にたりとこそ覺ゆれ。

第一の兵卒。猶太人等は、見えざる神を禮拜す。

カパドシア人。解しがたき事なり。

第一の兵卒。實に彼等は見えざるものをのみ信するなり。

カパドシア人。笑ふべきことかな。

ヨカオアンの聲。我が後に我よりも大なるもの來らむ。我は其履の紐を解くにも足らず。

彼來らば、世の寂しき處に歡あり、薔薇の如く花咲かむ。譬の目は光を見、聾の耳
 は開かれむ。乳哺兒は其手を龍の褥に延べ、又獅子の鬣を取りて之を導かむ。

第二の兵卒。彼を嚙まじめよ。彼は常に笑ふべきことを言ふ。

第一の兵卒。否、否。彼は聖人なり。また甚だ温厚なり。日毎に我、食ふべきものを與ふ
 れば、彼我に謝す。

カパドシア人。彼は何人ぞや。

第一の兵卒。豫言者なり。

カパドシア人。其名は。

第一の兵卒。ヨカナアン。

カパドシア人。何處より來れる。

第一の兵卒。荒野より。荒野にありて彼は、蝗蟲と野蠻とを食ひき。身には駱駝の毛衣を着
 け、腰には革の帯を巻きて、打見るに凄じき姿なりしが、多くの人々之に従ひき。使

徒もまたありしなり。

カパドシア人。彼は何をか談れる。

第一の兵卒。竟に言ひ難し。時には彼は、人を恐れしむることどもを言ふ。されど言ふところのものを解すること能はず。

カパドシア人。人彼を見ることを得べきか。

第一の兵卒。否。王之を禁じたり。

若きシリア人。姫は其面を扇の蔭にかくしぬ。その小く白き手は、鳥舎に向ひて飛ぶ鳩のやうにも翻る。白き蝶にも似たり。宛や、白き蝶にも似たり。

ヘロデアの侍従。底事ぞ。何故なれば姫を見る。汝姫を見るなかれ。——。何等かの恐しきこと起るべし。

カパドシア人（牢獄を指しながら）。如何に怪しき牢獄ぞや。

第二の兵卒。そは古き井戸なり。

カパドシア人。古き井戸さよ。住むものいかで身を害はざらむ。

第二の兵卒。嗚呼、否。王の兄、分封の君へロデアの兄、妃へロデアが初めの夫は、十二年の間をそこに幽せられき。されど死せざりき。十二年の末に彼は縊り殺されき。

カパドシア人。縊り殺されきさや。縊り殺せしは誰ぞ。

第二の兵卒。（死刑執行者なる巨大の黒人を指しながら）。あれなる漢、ナアマンにこそ。

カパドシア人。恐れざりしか。彼は。

第二の兵卒。嗚呼、否。王は彼に指環を贈りき。

カパドシア人。何の指環をか。

第二の兵卒。死の指環を。乃ち彼は恐れざりき。

カパドシア人。されど、王者を縊るは恐ろしきことなり。

第一の兵卒。何の恐ろしき事あらむ。王者も亦只一の首あるのみ。他さ何の撰ぶ所ぞ。カパドシア人。我は恐ろしと思ふ。

若きシリア人。姫は今起つ。今車を去る。いさ惱ましげなる面持して。あはれ此方へ、げに姫は我等の方へ。蒼白きかな。かばかり蒼白き姫を見しこそぞなき。

ヘロディアの侍従。願くは汝、姫を見るこそなけれ。
若きシリア人。さまよへる鳩にも似たり。……風に戦げる水仙花にも似たり。……
銀の花にも似たり。

(サロオメ入り来る。)

サロオメ。止まらじ。止まり難し。如何なれば王、其土龍めく目の眼瞼を揺がして、間なく我が方を見てあるにや。我が母の夫なる人の、かうやうにして我を見むこそ訝し。何の意ぞや。げにも我は、餘りによく之を知れり。

若きシリア人。饗筵を去りしか、姫よ。

サロオメ。旨き風かな。此處に我は呼吸を得たり。内にはエルサレムより來りし猶太人、その愚なる儀禮に就きて相争へる猶太人。飲みかつ飲みて其酒を舗石の上に瀉す野蠻

の族。目を彩り、頬を彩り、その鬘毛に波打たす、スミルナ生れの希臘人。黄褐色の上衣着て、硬玉の長き爪を有つ、言葉少き、老滑の埃及人。さては聞き知らぬ妄語を操る、兇惡にして野鄙なる羅馬人あり。あゝ、羅馬人のいかに厭はしきかな。粗暴なる彼等、卑賤なる彼等自ら高貴の風を装へり。

若きシリア人。いざこゝに、わが姫よ。

ヘロディアの侍従。如何なれば姫と語るか。嗚呼、何等かの恐ろしきこと起るべし。汝何故なれば姫を見る。

サロオメ。月を見るこそこの如何によきかな。宛ら小き貨幣の如し。小き銀の花の如し。寒冷にして純潔なり。必ずや童貞ならむ。童貞の美しさあり。さなり、童貞なり。曾つて自らを汚せしこそなし。他の女神とは殊に、人々に自らを委れしこそかつてなし。ヨカナアンの聲。見よ。主は來れり。人の子は近けり。馬怪は河に隠れぬ。山姫は河を去りて、森の葉蔭に横はれり。

サロオメ。呼ばはるものは誰ぞ。

第二の兵卒。預言者なり、姫よ。

サロオメ。あはれ。預言者さや。王の恐るゝ預言者なるか。

第二の兵卒。それは知られど、姫よ、呼ばはりしは預言者ヨカナアンなり。

若きシリア人。姫よ、汝が昇床かきざこをもて來さすべきか。園の夜は美しきに。

サロオメ。彼は我が母に就きて恐ろしきことを言ふ。言ふに非すや。

第二の兵卒。彼の言ふところは、我等竟に解せず。

サロオメ。さなり、彼は我が母に就きて恐ろしきことを言ふ。

(一人の奴隷入り來る。)

奴隷。姫よ、王は汝の饗筵きやうえんに歸らむことを願へり。

姫。歸らざらむ。

若きシリア人。憚らず言ふなり、姫よ、汝若し歸らずは、何等かの禍起るべし。

サロオメ。老人なるか、此預言者は。

若きシリア人。姫よ、歸るに如くはなし。我に汝を導き入れしめよ。

サロオメ。此預言者は……老人なるか。

第一の兵卒。否、姫よ、全く若し。

第二の兵卒。さだかにはあらず。彼をエリアなりと言ふものあり。

サロオメ。エリアとは誰ぞ。

第二の兵卒。去いにし日の、此國の預言者なり、姫よ。

奴隷。姫より王へ、われは如何なる答をか齎すべき。

ヨカナアンの聲。パレスチナの地よ。爾なんぢを打つ者の鞭折れたりきて樂むことなかれ。蛇の

種うはゝみより蟒生れ、之より生れたるもの鳥を呑むべければなり。

サロオメ。怪しき聲なるかな。我彼と談るを得むか。

第一の兵卒。恐くは難からむ、姫よ。王は何人にも彼と談ること許さず。高僧にすら、

彼と談ることを禁じたり。

サロオメ。我は彼と談らむことを希ふ。

第一の兵卒。行はれ難きことなり、姫よ。

サロオメ。我彼と談らまし。

若きシリア人。饗宴に歸ること、宜しからずや。

サロオメ。此預言者を連れ來れ。(奴隷去る。)

第一の兵卒。我等は敢へてせず、姫よ。

サロオメ(井戸に近づき、之を見下ろしながら)。黒きかな。かくまで黒き穴の中にあらむは、

争で恐しからざるべき。宛かも墓の如し。……。(兵卒等に) 汝等我が言葉を聞かざるか。預言者を連れ來れ。我は彼を見ることをねがふ。

第二の兵卒。姫よ、願くは我等に之を求めされ。

サロオメ。汝等いかなればしかく恣なる。

第一の兵卒。姫よ、我等の命は汝のものなり。されど我等は、汝の我等に求むるところを

爲すこと能はず。又げに、汝の之を求むるは、我等に對ひてすべきことに非じ。

サロオメ。(若きシリア人を見て)。嗚呼。

ヘロディアの侍従。そもいかに成り行くことぞ。必ずや、何等かの恐しきこと起るべし。

サロオメ。(若きシリア人の方へ歩み寄り。) 汝我が爲めに此事を爲すべきか。ナラホスよ、爲すべきか。汝我が爲めに此事を爲すなるべし。我日頃より汝にやさしうしぬ。汝我が爲めに之を爲すなるべし。我はたゞ彼、怪しき預言者を見まほしきのみぞ。人は彼に就きて多くのことを談りぬ。王の彼に就きて語れるをも、我は屢聞きぬ。王は彼を恐るゝものさ覺し。汝亦然るか、ナラホスよ、彼を恐るゝか。

若きシリア人。我は彼を恐れず、姫よ。我が恐るゝところの人はあることなし。たゞ王之を禁じたり、此井戸の蓋を撤り去ることを禁じたり。

サロオメ。汝我が爲めに此事を爲すなるべし、ナラホスよ。さらば明日、我が昇床にて、

偶像賣の門の下を行き過ぐる時、

若きシリア人。姫よ、爲すこゝ能はず、我は爲すこゝ能はず。

サロオメ。(微笑みながら) 汝我が爲めに此事をなすなるべし、ナラホスよ。さらば明日、

我が昇床にて、偶像賣の橋の側を行き過ぐる時、綿紗の面帕を透けて汝を見む。ナ

ラホスよ汝を見む。恐くは見て微笑まむ。嗚呼汝よく我が求むるこゝろのものを爲す
べきを知る。汝之を知る。……我は汝の之を爲すべきを知る。

若きシリア人。(第三の兵卒へ相圖をしながら) 預言者をして出で來らしめよ……。サロオ
メ 姫彼を見むこゝを希へり。

サロオメ。嗚呼。

ヘロディアの侍従。さくも怪しき月の有様かな。經帷子もて身を蔽はむとする、死にし婦
の手の如し。

若きシリア人。怪しき月の姿かな。宛らや琥珀の目を有つ、小き姫かとも。綿紗の雲を透

けて、小き姫のやうにも彼女は笑む。

(預言者井戸より出で來る。サロオメ彼を見て、徐かに逡巡る。)

ヨカナアン。罪惡の杯を充てたるものは何處にありや。其日來らば、銀の衣着て、總べ
ての民の前に死ぬべきものは何處にありや。彼をして來らしめよ。來りてかの、野に
叫び、王の家に叫びし者の聲を聞かしめむこゝのため。

サロオメ。彼は何人を指してか言へる。

若きシリア人。誰も知らず、姫よ。

ヨカナアン。壁に畫きし像を見て、彩色のカルデア人の像を見て、色欲の目に身を委れ、

ルカデアの地に使節を送りしさいふ婦は何處ぞ。

サロオメ。彼の談れるは我母のこゝなり。

若きシリア人。否、姫よ。

サロオメ。いな、彼の談れるは我母のこゝなり。

ヨカナアン。腰には飾の帯を束れ、頭には多くの色の冠を戴ける、アツシリアの軍監に、其身を任せし婦は何處ぞ。好き麻さ、風信子石を身にまきひ、金の盾を持ち、銀の兜をいたゞく、逞しきエジプトの若人に、その身を任せし婦は何處ぞ。行きて、婦をして、其罪惡の床より、其破倫の床より起たしめよ。起ちて主の道を備ふる者の言葉を聞き、不義の行を悔いしめよ。婦若し悔いせずして、其罪惡に止まらむとも、行きて、婦をして來らしめよ。主の籤は已に其手の中に置かれたればなり。

サロオメ。嗚呼。されど彼は恐ろし、彼は恐ろし。

若きシリア人。此ところを去れ、姫よ、我切に願ふ。

サロオメ。取分けて恐しきは其目なり。マイルの掛毛氈の、炬火に焼かれし黒き穴の如し。龍の巢へる、埃及の黒き洞の如し。きまぐれなる月に煩さるゝ黒き湖の如し。……彼の再び談るべし汝は思ふや。

若しシリア人。姫よ、去れ。我切に願ふ、此ところを去れ。

サロオメ。憔悴したるかな。瘦せたる象牙の彫像の如し。銀の像の如し。月の純なるが如く純なるを疑はず。月光の如く、銀箭の如し。その肌は象牙の如く冷かなるべし。近づきて見るこゝを得むか。

若きシリア人。否、否、姫よ。

サロオメ。我は近づきて見ざるべからず。

若きシリア人。姫よ。姫よ。

ヨカナアン。我を見る此婦は誰ぞ。我は婦の我を見るこゝを欲はず。如何なれば婦は、その輝かしき眼瞼の下に、黄金の目をもて我を見るや。我は婦の誰なるを知らず。誰なるを知るこゝを望まず。婦をして去らしめよ。我が談らまほしき婦に非ず。

サロオメ。我こそは猶太の姫、ヘロディアの女、サロオメなれ。

ヨカナアン。退け、バビロンの女。主の撰び玉へるものに近づくなかれ。汝の母はその不義の酒をもて地を充しぬ。其罪の叫びは神已に聞き玉へり。

サロオメ。いま一度ヨカナアンよ。汝の聲は我が耳に音楽の如し。
若きシリア人。姫よ、姫よ、姫よ。

サロオメ。いま一度、いま一度、ヨカナアンよ、我が何を爲すべきかを我に告げよ。

ヨカナアン。ソドムの女、我に近づくことなけれ。たゞ、面帕もて汝の顔を蔽ひ、汝の頭に灰を撒き、野に出でて人の子を尋れよ。

サロオメ。それは誰ぞ、人の子さ云へるは、汝の如く美しきか、ヨカナアン。

ヨカナアン。我が前を去れ。我はこの王宮にありて、死の使の羽撃を聞く。

若きシリア人。姫よ、切に願ふ、内に入りたまへ。

ヨカナアン。主の天使、神の使よ、爾に、爾が劔もて何をか爲す。爾此王宮に誰をか求むる。銀の衣着て死すべきものの日は尙ほ未だ來ざるに。

サロオメ。ヨカナアンよ。

ヨカナアン。呼ぶものは誰ぞ。

サロオメ。ヨカナアンよ、我は汝の體に憧る。汝が體は、刈る人の刈り残したる野百合の如く白し。汝が體は、猶太の山に降り積りて、その谷に流れ落つる雪の如く白し。亞刺比亞の女王の苑なる薔薇の花も、汝が體の如く白からじ。亞刺比亞の女王の苑なる薔薇の花も、亞刺比亞の女王の香料園も、葉を踏む曉の光の足も、大海の胸に休らふ月の胸も、……世に汝が體の如く白きものぞなき。我が汝の體に觸るゝを許せ。

ヨカナアン。退け、バビロンの女。婦によりて世の悪は來ぬ。我に談ることなけれ。我は爾に聽かざらむ。我はなま主なる神の聲に聽く。

サロオメ。汝の體は恐るべき體なり。業病人の體の如し。毒蛇の爬へる塗壁の如く蠍の巢へる塗壁の如し。思まはしき物に充てる、白き墓の如し。怖るべし、汝の體は怖るべし。我が心溺るゝは汝の髪なり、ヨカナアンよ。汝が髪は葡萄の總の如し、エドム人の地なるエドムの葡萄の樹より垂るゝ、黒き葡萄の總の如し。汝が髪はレバノンの香柏の如し、獅子來りて其蔭に隠れ、晝は盜人來りて其蔭に隠るゝ、大なるレバノンの香柏の如

し。月隠れ、星の畏るゝ、長き黒き夜も、汝が髪かみの如く黒からじ。森を領りやうする沈黙も、亦しかく黒からじ。世に汝が髪かみの如く黒きものぞなき。……我が汝の髪かみに觸るゝを許せ。

ヨカナアン。ソドムソドムの女、退け。我に觸るゝこそ勿れ。主なる神の宮を瀆けがさされ。

サロオメ。汝が髪かみは怖ろし。埃あはと泥どろに被かはれたり。汝の額かぶに置かれたるは荆棘いばらの冠かぶの如し。

汝が頸のどの周圍まわりに巻く、毒ある蛇へびの集あまれるが如し。我は汝の髪かみを愛せず。……我が

欲ねがふは汝の口くちなり、ヨカナアンよ。汝の口くちは象牙ちひさの塔たの上うへの紅あかき帯おびの如し。象牙ちひさの小刀かたな

もて二ふたつに割さきし柘榴ざくろの如し。マイルの苑そのに咲く、薔薇ばらより赤あかき柘榴ざくろの花はなも、かくは赤

からじ。王達わうたつの來るを告げ知らせ、敵軍てきぐんを畏れしむる赤あかき喇叭らふの音ねも、亦かくは赤から

じ。汝の口くちは酒槽さかづねの中に酒さけを踏ふむ者等ものらの足あしよりも赤あかし。汝が口くちは、神殿かみに棲すまひて、僧達そうたつ

に飼かはるゝ鳩とびの足あしよりも赤あかし。森もりの中に獅子ししを屠ころり、鍍金きんぎょの虎とらを見て來りし人の足あしより

も赤あかし。汝が足あしは、漁夫さかなづかひ共ども、黄昏たふしの海うみに見出みでて、王わうの爲ためめに貯たくわへし珊瑚さんごの枝えだの如し。

……モアブ人モアブモアブの鑛坑こうけいより掘出くわいで、王之わうを彼等かれらより取りし朱しゆの如し。朱しゆをもて彩

られ、珊瑚さんごをもて尖頭せんとうを飾かられし、波斯王ペルシアの弓ゆみの如し。世に汝が口くちの如く赤あかきものぞ

……なき。……我が汝の口くちに接吻せきふんするを許せ。

ヨカナアン。誰か許さむ。バピロンの女。ソドムソドムの女。誰か許さむ。

サロオメ。我汝が口くちに接吻せきふんせむ、ヨカナアン。汝が口くちに接吻せきふんせむ。

若きシリア人シリア。姫ひめよ、姫ひめよ、没藥もつやくの園うゑのやうなる汝、鳩とびの鳩とびなる汝、此人を見され、此人

を見され。斯ごとかる言葉を彼かれに語るな。堪たへがたし。……姫ひめよ、是等これらのこゝを語かたられ。

サロオメ。我汝が口くちに接吻せきふんせむ、ヨカナアン。

若きシリア人シリア。嗚呼ああ。(自らを殺して、サロオメとヨカナアンとの間に倒る。)

ヘロデアヘロデアの侍従しやくじゆん。若きシリア人シリアは自らを殺しぬ。若き軍監ぐんかんは自らを殺しぬ。我が友なり

し彼は自らを殺しぬ。我は小こき薰香くんかうの匣はこ、銀製ぎんせいの耳環みみかぎを彼かれに與たまへしが、彼今は自

らを殺しぬ。嗚呼ああ彼、何等いかんかの禍わざはひ來るべきことを言いはざりしか。我も亦言いひぬ、而し

てそのこゝ遂ついに來りぬ。月のいづなきものを求めたりしは知りしかど、求めらるゝも

のの彼かれなるは、我流石しかたに知らざりき。嗚呼ああ、如何いかんなれば我は月つきより彼を隠かくさりしか。

もし洞穴ほらあなに隠してありしならむには、月之を見ざるべかりしを。

第一の兵卒。姫よ、若き軍監は、今し自らを殺したり。

サロオメ。我が汝の口に接吻するを許せ、ヨカナアンよ。

ヨカナアン。爾恐るゝところなきか、ヘロテイアの女むすめ。我この王宮にありて、死の使の羽撃はぶたぎ

聞きしと告げしに非ずや。來れるに非ずや、死の使は來れるに非ずや。

サロオメ。我が汝の口に接吻するを許せ。

ヨカナアン。姦淫の女、爾を救ひ得るもの唯だ一人あり。我が已に談りし人こそ其人なれ。行

きて其人を尋ねよ。其人はガリラヤの海うみに泛べる舟の中にあり、其使徒しとと談れり。海

の岸に跪き、名を擧げて其人を呼べ。其人爾に來る時あしもとへ凡べて其人を呼ぶものには其人來るゝ、其人の足下に身を屈め、爾が罪の赦しを其人に請へ。

サロオメ。我が汝の口に接吻するを許せ。

ヨカナアン。咀はるべきかな、汝不義なる母の女むすめ、汝は咀はるべきかな。

サロオメ。我汝が口に接吻せむ、ヨカナアン。

ヨカナアン。我爾を見ざるべし。爾は咀はれたり、サロオメよ、爾は咀はれたり。(古井戸

へ降り行く。)

サロオメ。我汝が口に接吻せむ、ヨカナアン。我汝が口に接吻せむ。

第一の兵卒。我等この死骸を運び去らざるべからず。王は彼自らの殺せしものゝはか、如何なる死骸をも見ることを欲はざるべし。

ヘロテイアの侍従。彼は我が兄弟なりき。兄弟よりも我に近かりき。我は彼に薰香のほそり小き

匣はこを與へき、その常に腕に着けたりし瑪瑙めなうの環わづを與へき。夕ゆづべは我等相共に河の邊ほとりを、

巴且杏はたんきやうの樹まの間まを行き、彼は屢々其國の物語りして聞かせき。彼はいさ蕭しめやかに談りき。

聲音こゝろは笛の如く、笛を吹く人の如くなりき。彼はまた、河の中なる自らの影を眺めて、

太いたく喜べりき。我之を責むるを常じょうとしき。

第二の兵卒。汝の言ふところ當れり。我等この死骸を隠さざるべからず。王に見さすべか

らす。

第一の兵卒。此處に王は來らざらむ。彼は竟に露臺のほに上ることなし。彼の預言者を恐るゝこと過ぎたり。

(ヘロデ、ヘロデシア、並びに廷臣一同入り來る。)

ヘロデ。サロオメは何處ぞ。姫は何處ぞ。など姫は我が命に従ひて、饗筵きやうえんに歸ることなせざりしや。嗚呼、姫はかしこにありしよ。

ヘロデシア。汝姫を見るべからず。汝は常に姫を見る。

ヘロデ。今宵は月の怪しき姿に見ゆ、怪しき姿には見えざるか。かの到るころに愛人を求むる狂女の如し。彼女はまた裸體らたいなり。全く裸體なり。雲其裸體を蔽はしめむさすれど月は許さず。赤裸々にして蒼穹そうきやうに露はる。酩酊せる婦の如く、蹒跚まごとして雲の中を行く。……たしかに愛人を求むるなり。酩酊せる婦の如く、蹒跚まごして行くに非ずや。狂女に似たり、似たらすや。

ヘロデシア。否、月は月の如し。唯是のみ。内に入らまし。……我等こゝにありて何をかなさむ。

ヘロデ。我はこゝに止まらむ。絨緞を敷け、マナツセエ。炬火たいまつを焚き、象牙の卓たくを碧玉の卓を持ち出せよ。この處の空氣は旨し。更にわが客人達きやくだんと酒を酌まむ。我等は皇帝の使臣に、あらゆる尊敬の意を致さざるべからず。

ヘロデシア。汝の止まるは、客人達の故に非ず。

ヘロデ。さなり、この處の空氣は旨し。いざ、ヘロデシア。客人達我等を待てり。嗚呼、我踏み滑りしよ。血に滑りしよ。凶兆こそ覺えたれ。何なれば斯かるところに血はありし。……また此死骸なきがらは。此死骸は底事なにごとぞ。かの客人に、人の死骸を示すのみにて、何の饗應をもせぬ、埃及の王の如しと、汝等そもく我を思ふか。何者の死骸ぞ。我は見ることを欲はず。

第一の兵卒。王よ、そは我等の軍監なり。汝が僅かに三日の前、衛兵の軍監に任じたる、

かの若きシリア人なり。

ヘロデ。我未だ彼を殺せよこの命は下さざりしに。

第二の兵卒。自ら殺せしなり、王よ。

ヘロデ。何の故ぞ。我は彼を我が衛兵の軍監に任じたりき。

第二の兵卒。王よ、我等之を知らず。されど彼、自らの手をもて、自ら殺せしなり。

ヘロデ。奇異なることかな。自らを殺すものは、たゞかの羅馬の哲人等このみ思ひたりしな。眞か、テイゲリヌス、羅馬の哲人等の自らを殺すこと云へるは。

テイゲリヌス。自らを殺すもの、眞にあり。彼等はストイックの學徒なり。ストイックの學徒は教養なき輩なり。笑ふべき輩なり。我は全く笑ふべき輩として彼等を見る。

ヘロデ。我も亦汝に同じ。人自らを殺すは笑ふべきことなり。

テイゲリヌス。羅馬の人にして、彼等を笑はざるものはなし。皇帝は諷刺の筆を執りぬ。そは到るまゝに朗誦せられたり。

ヘロデ。嗚呼。諷刺の筆を執りしとや。驚くべし。皇帝の多能は驚くべし。……さるにても、若きシリア人の自らを殺せしこと奇異なり。我は彼の自ら殺せしを悲む。我は太く悲む。そは彼は美しかりき。またいさ美しかりき。彼はいさ惱ましげなる目を有ちき。彼の惱ましげにサロオメを見しを我は見き。實に我は、彼のサロオメを見ること過ぎたりまこと思ひしか。

ヘロデア。サロオメを見ること過ぎたるものは、尙ほあるなり。

ヘロデ。彼の父は王なりき。我は彼の父を其王國より逐ひき。妃なりし母は、汝ヘロデア之を奴隷となしき。さて彼は我が客人としてここにありき。故に我は彼を我が軍監に任じき。我は彼の死にしの悼む。そも、いかなれば汝、この體を棄てたるや。我は見ることを欲はず、——取りて去れ。(兵卒等死骸を運び去る。)冷かになりぬ。風や吹く。風は吹かぬか。

ヘロデア。否。風は吹かず。

ヘロデ。知らずや、かくも吹き渡れるな。………借て我はいづこにか、羽撃はぶたきに似たるものを聞く、巨おほいなる物の羽撃はぶたきに。汝聞かすや。

ヘロデア。我は聞かす。

ヘロデ。はや已に聞えずなりぬ。されど我は聞きたりき。吹く風なりき。去りぬを覺し。されど、否、再び聞ゆ。汝聞かすや。宛さながらら羽撃の音に似たり。

ヘロデア。我汝に告げむ、何物もなし。汝は病めり。内に入らばや。

ヘロデ。病めるものは我に非ず。病みて死ねばかりなるは汝の女むすめにこそ。かくまでに蒼白き姫を見しこそなし。

ヘロデア。我は汝に姫を見されと告げぬ。

ヘロデ。我に酒を齎もたらし來れ。(酒を持って來ぬ)サロオメよ、來りて我と共に聊いさかの酒を飲め。我はこゝに秀れたる酒を有てり。皇帝自ら之を贈り賜ひき。爾が小く紅き唇をそれれに浸せよ。我がその盃を乾さむため。

サロオメ。我は湯を覺えず、王よ。

ヘロデ。汝、この汝の女むすめの如何に答ふるかを聞かすや。

ヘロデア。姫の言ふところは正し。如何なれば汝常に姫を見る。

ヘロデ。我に熟したる果くだものを齎もたらし來れ。(果を持って來ぬ)サロオメよ、いざ我と共に果を食

へ。我は果に残る汝が小き齒形の見まほしきなり。此果のいささかを口にせよ。我は
その餘れるところを食はむ。

サロオメ。我は饑を覺えず、王よ。

ヘロデ(ヘロデアに)。汝この汝の女を如何に育てしかを見る。

ヘロデア。我が女を我は、王の家に生れたり。汝にありては、汝の父は駱駝追にてありしよ。剩あまつさへ、彼は盜賊にてもありしよ。

ヘロデ。偽を言ふものかな。

ヘロデア。汝よく其眞實なるを知れり。

ヘロデ。サロオメよ、いざ我が側に坐せ。我は、汝の母の座を汝に與へむ。

サロオメ。我は疲を覺えず、王よ。

ヘロデア。汝姫の如何に汝を思へるやを見る。

ヘロデ。我に齋し來れ、我に——我が願へるは何物なりしか。我は忘れぬ。嗚呼、嗚呼。

我は思ひ出でたり。

ヨカナアンの聲。見よ、時は來れり。我が豫言せしころのことは起りぬ。——主なる神は言ひたまふ。我が談りしころの日は近きぬ。

ヘロデア。彼をして噤^つましめよ。我は彼の聲に聽かざるべし。此人は常に我を辱むるこ

さを言へり。

ヘロデ。彼は曾つて汝を辱むることを言はず。しかのみならず、彼はいさ大なる豫言者なり。

ヘロデア。我は豫言者を信ぜず。人何事の來るかを告げ得べきや。誰も知らず。又、彼

は常に我を辱むることを言へり。されと思ふに汝は彼を恐るゝものゝ如し。我は

よく汝の彼を恐るゝことを知る。

ヘロデ。我は彼を恐るゝことなし。我は何人も恐るゝことなし。

ヘロデア。我汝に告げむ、汝は彼を恐る。汝若し恐れずば、何故彼を猶太人等の手に渡さ

ざりしか。この過ぐる六月の間、彼を得むとて騒ぎ立てりし猶太人等の手に、何故彼

を渡さざりしか。

第一の猶太人。眞に、我が王よ、寧ろ我等の手に彼を渡すべし。

ヘロデ。此事に就きては、また言ふなかれ。我は已に我が答を汝等に與へぬ。我は彼を汝等の手に渡さざるべし。彼は聖人なり。神を見たる人なり。

第一の猶太人。有難きことなり。豫言者エリアの後、神を見たる人はなし。エリアは面のあたり神を見し最後の人なり。今日日は神自らを示し玉はず。神は自らを隠し玉ふ。乃ち大なる不善は地に來りぬ。

第二の猶太人。實に豫言者エリアの果して神を見しや否や、誰か知らむ。もしくは、彼の
見しと云ふもの、たゞ神の影に過ぎざりしやも知るべからず。

第三の猶太人。神は如何なる時にも隠るゝことなし。あらゆる時、あらゆる處に自らを示
し玉ふ。神は善きものゝ中にも、惡しきものゝ中にもひそしく在せり。

第四の猶太人。汝さやうに説くべからず。それは甚だ殆き教理なり。それは、人々希臘の哲學
を教ふるに云ふ、アレキサンドリアより來りし教理なり。而して希臘人は異邦人なり、
割禮すらも受けざるなり。

第五の猶太人。神の如何にして働き玉ふかは誰も知らず。彼の道は深秘なり。我等の惡し呼
ぶものの善にして、我等の善し呼ぶものの惡なること、いかでかなからむ。人何の知る
ところぞ。我等はたゞ頭を低うして彼の意志に従ふべきのみ。神は甚だ力強ければな
り。彼は弱き者と共に、強きものをも打碎く。彼は如何なる人をも顧慮せざればなり。
第一の猶太人。汝の談るところの如し。神は恐れて恐るべし。神は人の白にて夢を破る如

く、強き者をも弱き者をも打碎く。しかも人にありては、彼はかつて神を見ず。豫言
者エリアの後、神を見たるものあることなし。

ヘロデア。彼等をして噤ましめよ。煩はしきに堪へざるなり。

ヘロデア。されど我は、ヨカナアンの眞に汝等の豫言者エリアなるよしを聞きぬ、
猶太人。有りがたきことなり。豫言者エリアの日より已に三百年を経たり。

ヘロデア。此人の豫言者エリアなることを言ふものあり。

ナザレ人。彼は確かに豫言者エリアなり。

猶太人。否。彼は豫言者エリアには非じ。

ヨカナアンの聲。見よ、其時は近けり、主の時は近けり。我は世の救主たるべき人の足を
山の上に聞く。

ヘロデア。何の意ぞ、世の救主とは。

テイゲリヌス。皇帝の取るべき稱號なり。

ヘロデ。されど皇帝の猶太に来ることはなし。昨日我は、羅馬よりの書簡を受取りしかど、此事なかりき。さて汝、冬の間を羅馬に過せしテイゲリヌス、此事に就きては何も聞かざりしか。

テイゲリヌス。王よ、我此事に就きては何も聞かざりき。稱號に就きては我さきに説明したりき。そは皇帝の一の稱號なり。

ヘロデ。されど皇帝は來ること能はず。痛風に惱めるなれば。其足は象の足の如しとぞ云ふなる。加ふるに政略の上の事情もあり。彼羅馬を去らば、羅馬を失はむ。彼の來ることなかるべし。されば皇帝は皇帝なり、其意に違はば則ち來るべし。

第一のナザレ人。豫言者の談りしは、皇帝のここに非ず、王よ。

ヘロデ。何ぞか言へる。——皇帝のここに非ずと云へるか。

第一のナザレ人。然り、我が王よ。

ヘロデ。——さらば彼の談りしは、如何なる人に就きてか。

第一のナザレ人。已に來れる救主に就きて。

第一の猶太人。救主は未だ來らず。

第一のナザレ人。彼は已に來れり。來りて到るところに奇蹟を行へり。

ヘロデア。奇蹟とよ。奇蹟とよ。我は奇蹟を信ぜず。我は餘りに多くを見たり。(侍從に) 我が扇を。

第一のナザレ人。此人は眞の奇蹟を行ふ。即ちガリラヤの或る小き町、重要のある町にて、彼は婚姻の席に水を變じて酒となしぬ。居合はせし人々、之を我に語りき。又カペナウソンの門の前にありし二人の業病人は、たゞ彼の手の之に觸るる事のみにて癒えたり。

第二のナザレ人。否。彼がカペナウソにて癒せしは譬なり。

第一のナザレ人。否。そは業病人なりき。されど彼は盲ひたる人々をも癒しぬ。而してその山の上にて、天使と語れるを見しものあり。

サドカイ人。天使は存在せず。

パリサイ人。天使は存在す。されどその人の天使と語りしは、我之を信ぜず。

第一のナザレ人。彼の天使と語れるとき、多くの人々之を見き。

サドカイ人。天使と語りしに非ず。

ヘロデア。此等の人々のいかに煩はしきかな。笑ふべき人々かな。(侍従に。)いかにせし、

我が扇を。(侍従扇を取りてヘロデアに渡す。)汝の面は夢想到に耽る人の如し。汝夢想到に耽るべからず。夢想到に耽るは、たゞ病める人のこののみ。(扇をもて侍従を打つ。)

第二のナザレ人。又またヤイロスの女の奇蹟もあり。

第一のナザレ人。げにそは確かなり。何人もまた言ひ消すこと能はじ。

ヘロデア。此二ツの人々心狂ひたり。彼等は餘りに長く月を見ぬ。彼等をして噤ましめよ。ヘロデア。ヤイロスの女の、その奇蹟とは何ぞ。

第一のナザレ人。ヤイロスの女は死にき。其人は女を死より蘇よみがへらせき。

ヘロデア。何ぞか言へる。彼死より人を蘇よみがへらせしや。

第一のナザレ人。げに王よ、彼は死にし人を蘇よみがへらせき。

ヘロデア。我はその人のそを爲すことを望まず。其人のそを爲すことを禁す。我は何人にも、死にし人を蘇よみがへらすことを許さじ。須らく其人を見出し、我が、其人の死にし人を蘇よみがへらすを禁することを告げざるべからず。其人今は何處にかある。

第二のナザレ人。彼は到るころに在り、我が王。されど彼を見出でむこと難し。

第一のナザレ人。彼は今サマリアに在りまきく。

第一の猶太人。彼若しサマリアに在らば、その救主にあらざること、たやすく知るべし。救主の來るべきは、サマリア人のところに非ず。サマリア人は阻はれたる民なり。神殿に供物を備ふることなし。

第二のナザレ人。彼數日の前、サマリアを去りき。思ふに今は彼、エルサレムに近きころにあるなるべし。

第一のナザレ人。否。彼はかしこに在らず。我はエルサレムより來りて間まなし。人々彼の

音信を聞かざること。已に二月に亘れり。

ヘロデ。何の關するところぞ。たゞ彼を見出し、彼に告げしめよ、我へロデ王の言を彼に告げしめよ。「我汝の死にし人を蘇らすことを許さじ」と。水を變じて酒となし、業病人を、譬の人を癒す……此等のことは、彼心の儘に之を爲すを得む。我此に就きて何の言ふところもなし。固より業病人を癒すはよき事なり。されど、如何なる人も死にし人を蘇らすべからず。死にし人もし歸り來らば、いかに恐るしからむ。

ヨカナアンの聲。嗚呼、淫逸なるものよ。娼婦よ。嗚呼、金の目と、鍍金の眼瞼もてるバビロンの女。主なる神かく言ひ玉ふ、人々の群起ちて婦に對へ。人々石をとりて婦を打て……ヘロデア。彼を噤ませよ。

ヨカナアンの聲。軍監共をして、其劍に婦を貫かしめよ。其盾をもつて婦を打ち殺さしめよ。ヘロデア。寧ろ其言葉を耻ぢよ。

ヨカナアンの聲。かくてこそ、我は地の上より總べての不義を去るべきなれ。惡しき行

な、總べての婦に倣はせざるを得べきなれ。

ヘロデア。汝彼の我に就て言へるを聞くか。汝は彼の、汝の妻なる我を誹謗するに委すや。

ヘロデ。彼は汝の名を言はざりき。

ヘロデア。何の問ふところぞ。汝よく、彼の誹謗せむとするもの、我なるを知る、而して我は汝の妻なり。妻に非すや。

ヘロデ。眞に、親愛なるまた高貴なるヘロデアよ。汝は我妻なり。前には汝我が兄の妻なりき。

ヘロデア。その腕より我を奪ひしものは汝なり。

ヘロデ。眞に、我は彼よりも力強かりき。……さばれ、我等また此事に就きて言はざらむ。我之言ふを欲はず。是れ、預言者の語れる恐ろしき言葉の基くところ。恐るらくはその故に禍起るべし。我等また此事に就きて言はざらむ。高貴なるヘロデアよ、我等客人達を等閑にしたりき。我が愛するもの、汝我が杯を充せ。いざ銀の大盃に、玻

我等客人達を等閑にしたりき。我が愛するもの、汝我が杯を充せ。いざ銀の大盃に、玻

璃の大盃に酒を充せよ。我皇帝を祝して飲まむ。こゝに今羅馬の人々あり。我等皇帝を祝して飲まざるべからず。

一同。皇帝萬歳。萬萬歳。

ヘロデ。汝、汝の女を見ずや。如何にその色青きかな。

ヘロデア。姫の色青くとも、青からずとも、汝にこりてそも何かある。

ヘロデ。かくまでに蒼白き姫を見しこそなし。

ヘロデア。汝姫を見るべからず。

ヨハネの聲。其日來らば、日は喪服の如く黒くなり、月は血の如く赤くなり、天の星は、無花果の樹より落つる未熟の無花果の如く地に落つべし。而して地の王達は恐るべし。

ヘロデア。嗚呼、嗚呼。月は血の如く赤くなり、星は未熟の無花果の如く地に落つべし。

と云へる、其日こそは見まほしけれ。此預言者の談るは醉人の如し。……さばれ我は彼の聲音に堪へかねたり。我は其聲音を厭ふ。沈黙を命ぜよ。

ヘロデ。命ぜずともあらなむ。我は彼の言ひしことを解するこそ能はず。されど、恐らくはこれ前兆なるべし。

ヘロデア。我は前兆を信ぜず。彼の談るは醉人の如し。

ヘロデ。神の酒に酔へるにはあらじか。

ヘロデア。如何なる酒ぞ、神の酒とは。如何なる葡萄の園よりか集められ、如何なる酒槽にか醸されし。

ヘロデ。(此時より彼、間なくサロカメを見る。)テイゲリマス、汝前頃羅馬にありし時、皇帝は……かの問題に就きて汝と談りしか。

テイゲリマス。何の問題に就きてか、我が王よ。

ヘロデ。何の問題に就きてか。嗚呼。我前に汝に問ふところありき、ありしに非ずや。我は何を汝に問はむとしたりしかを忘れぬ。

ヘロデア。汝復もや我が女を見る。汝姫を見るべらず。我已にかく言へり。

ヘロテ。汝他に何の言ふところもなし。

ヘロデア。我は重ねて之を言ふ。

ヘロテ。人々の喧しく談り合へる、神殿の修理は如何せらるべき。人々は聖堂の帳の見えずなりしと云へり。果して見えざるか。

ヘロデア。それを盗みしものは汝自らなり。汝妾りに語りて、智慮を加へず。我は此處に止まらじ。内に入らばや。

ヘロテ。我が爲めに舞へ、サロオメよ。

ヘロデア。我は姫をして舞はしめじ。

サロオメ。我は舞ふことを欲はず、王よ。

ヘロテ。ヘロデアの女、サロオメ、我が爲めに舞へ。

ヘロデア。姫をして意の儘にあらしめよ。

ヘロテ。我汝に舞ふことを命ず、サロオメ。

サロオメ。我は舞はじ、王よ。

ヘロデア（笑ひながら）。汝は姫のいかに汝に従ふかを見る。

ヘロテ。姫の舞ふと舞はざるを、我にきりて何かあらむ。敢へて問ふところなし。今宵は我心満足らへり。いさ満足らへり。かくも満足らひしことはかつてなし。

第一の兵卒。王は浮き立たぬ面持なり。浮き立たぬ面持には非ずや。

第二の兵卒。さなり、浮き立たぬ面持なり。

ヘロテ。いかで我、心満足らばであるべき。世界の主なる皇帝は、萬物の主なる皇帝は、

甚だ我を愛せり。近く我に、いとも貴き賜物を賜はりぬ。又彼は我が敵なるカパドシアの王を羅馬に召さむ。ことを我に誓ひぬ。羅馬にありては、皇帝彼を礎にするるべし。彼はよくその、凡べての爲さむとするところを爲せばなり。實に皇帝は我が主なり。乃ち我が心満足らふべきなり。またげに満足らへり。かくも満足らへることはなし。世に我が幸福を害ひ得べきものあることなし。

ヨカナアンの聲。彼は此玉座に据えらるべし。彼は深紅と紫との衣を纏ふべし。其手には汚瀆をじくに充てる黄金わうこんの盃もを有たむ。而して主の天使彼を打たむ。彼は蟲蟻むしらに食はれむ。

ヘロデア。汝は彼の汝に就きて言へるを聞く。彼は汝の蟲蟻むしらに食はるべきを言ふ。

ヘロデア。彼の語れるは我が事に非ず。彼はかつて我に不利なることを語らず。彼の語れるはカパドシアの王の事なり、我が敵なるカパドシア王のこゝなり。蟲蟻むしらに食はるべきは彼なり。我に非ず。此豫言者は我わが兄の妻を妻にせし罪の外、かつて我に不利なることを語らず。恐らくは彼正しからむ。そは眞まことに、汝子を生まざればなり。

ヘロデア。我子を生ますまよ。我生ますまよ。汝之を言ふか。常に我が女むすめを見る汝、我が女を舞はせて自ら娛まむとする汝、汝之を言ふか。汝の語るは痴人ちじんの如し。我は一人の兒こを生みぬ。汝にはたゞ一人の兒もなし。汝の奴隷の一人も汝の爲めに生ます。子なきものは汝なり、我に非ず。

ヘロデア。静かにしてあれ。婦よ。我は汝に子なきを言ふ。汝我に子を生ます。而して豫言

者は我等の婚姻の眞の婚姻に非ざるを言へり。彼は言ふ、そは破倫なる婚姻なり、必ずや不善むすを齎もたらむ。……恐くは彼正しからむ。彼は確かに正しきなり。されど今はそれにつきて言ふべきに非ず。我は此時を幸福にせむされがふ。眞に我は幸福なり。何の缺くるこゝろもなし。

ヘロデア。今宵は我、汝の氣色けしきのしかく美しきを喜ぶ。汝の平生に非ざるなり。されど已に遅し。内に入らばや。我等明日めいたんの狩獵めいを忘れされ。皇帝の使臣はあらゆる尊敬の意を致されざるべからず。致さるべきに非ずや。

第二の兵卒。王は淨きよき立たぬ狀さまに見ゆ。

第一の兵卒。さなり、淨きよ立たぬ狀さまに見ゆ。

ヘロデア。サロオメ、サロオメ、我が爲めに舞へ。願はくは我が爲めに舞へ。今宵は我悲しかり。今宵は我悲しかり。我此處こゝに來りし時血に滑りぬ。凶兆きんせうなり。又我は虚空こゝろに羽撃はぶたきを、巨なる羽撃の音を聞きぬ。我はその何の意なるを知る能はず。……今宵は我悲しかり。

されば我が爲めに舞へ。我が爲めに舞へ、サロオメ、我切に願ふ。汝若し我が爲めに舞はば、汝はその望むところのものを得む、而して我は我が王國の半ばをも汝に與ふべし。サロオメ（起ちながら）。汝實に、我が汝に求むるところは、何にてもあれ、我に與ふべきか、王。

ヘロデア。舞ふこそなかれ、我が女。

ヘロテ。汝の我に求むるところは、何にてもあれ、我が王國の半ばをも。

サロオメ。汝之を誓ふか、王よ。

ヘロテ。我之を誓ふ、サロオメよ。

ヘロデア。舞ふこそなかれ、我が女。

サロオメ。汝何によりて之を誓はむとするか、王よ。

ヘロテ。我が命によりて、我が王の冠によりて、また我が神達によりて。汝若し我が爲めに舞ふことをだにせば、汝の望むところは何にてもあれ、我が王國の半ばをも汝に

與へむ。サロオメ、サロオメ、我が爲めに舞へ。

サロオメ。汝は誓へり、王よ。

ヘロテ。我は誓へりサロオメよ。

ヘロデア、我が女、舞ふこそ勿れ。

ヘロテ。我が王國の半ばをも。汝若し我が王國の半ばを求むるの心あらば、サロオメよ、汝は女王としていかに華かあるべきぞ。彼女は女王の如く華かにしてあらざるべきか。嗚呼。冷かになりぬ。氷の風吹き、我は聞く、……。如何なれば我此羽撃の音を虚空に聞くや。嗚呼。この露臺の上を徘徊する、巨なる黒き鳥のあるにやあらむ。など我は之を見得ざるか。此鳥の、羽撃の音は恐ろし。風寒し。否、寒きに非ず、むしろ暑きなり。我が息は塞がらむとす。我が双の手に水を注げ。我が口に雪を置け。我が外套を解き去れよ。疾く、疾く、我が外套を解き去れよ。否、むしろ其儘にせよ。我を傷くるは冠冕なり、我が薔薇花の冠冕なり。花は苑も火のごとし。我が額を焼きぬ。へ花冠を脱して

之を卓上に投ず。嗚呼。我今は呼吸を得たり。その花瓣のいかに紅きかな。衣に染みたる血の如し。敢へて問ふところに非ず。耳目の觸るゝところ、一切の事物に象徴を見出さむとするは善からじ。人生の恐怖は是によりて加はるゝこと過ぎたり。むしろ血の斑點は薔薇の花弁の如く愛らしき云はむに如かず。又如かず。……されど、是に就きては語ることを止めむ。今我が心満足らふ。我が心満足らへり。何ぞその満足らへるを怪まむ。汝の女は我が爲めに舞はむとす。汝我が爲めに舞はざらむか、サロオメよ。汝我が爲めに舞はむことを約しぬ。

ヘロデア。我は彼女をして舞はしめざらむ。

サロオメ。我汝の爲めに舞はむ、王よ。

ヘロデア。汝は汝の女の言へるを聞く。彼女は我が爲めに舞はむとす。汝我が爲めに舞ふはよし、サロオメよ。しかして汝我が爲めに舞ひし時、何にてもあれ、汝の欲ふところのものを求むることを忘れざれ。汝の欲ふところは、何にてもあれ、我が王國の半ばを

汝に與へむ。我は誓ひぬ。誓ひしに非ずや。

サロオメ。汝は之を誓へり、王よ。

ヘロデア。而して我はかつて我が言を食みたる事なし。世の誓を棄つる人々も殊なり。我は如何にして詐るべきやを知らず。我は我が言の奴隷にして、我が言は王者の言葉なり。カパドシアの王は曾つて虚言の舌を有ちき。されど彼は眞の王者に非ず。懦夫なり。又彼は我に負ふところの債あれど、償ふことをせざるなり。彼は我が使節をも辱めぬ。彼は傷けることを言へり。されど彼の羅馬に到るべき、皇帝は之を磔にせむ。我は皇帝の彼を磔にすべきを知る。よし皇帝彼を磔にせずとも、尙ほ蟲蟻に食はれて彼は死せむ。豫言者之を豫言せり。さてサロオメよ。如何なれば汝は躊躇へる。

サロオメ。我は奴隷の我に、薫香も七の面帕を齎し來り、我が足の屣の脱がせらるゝを待てり。(奴隷は薫香も七の面帕を齎し來り、サロオメの屣を脱がす。)

ヘロデア。嗚呼、汝素足にて舞はむとや。それはよし、それはよし。汝の小さき足は鳩の如

くならむ。棺に舞へる小さき白花の如くならむ。……否、否、彼女は血の上に舞はむとす。地に瀉れたる血汐あり。血の上に舞ふべからず。血の上に舞ふは不吉の兆ぞ。
 ヘロデア。よしや彼女、血の上に舞はむとも、法にきりて何かある。汝は已に其淵を涉りぬ。……。

ヘロテ。我に取りては何かあるぞ。嗚呼、月を見よ。赤くなりぬ。血の如く赤くなりぬ。嗚呼豫言者の豫言は眞實なり。彼は月血の如く赤くなるべしと豫言しき。かく豫言せしに非ずや。汝等は皆彼のかく預言せしを聞けり。さて今月は血の如く赤くなりぬ。汝等之を見ざるか。

ヘロデア。嗚呼、さなり。我よく之を見る。星は未熟の無花果の如く落ちたり、落ちたらずや。日は喪服の如く黒くなれり。地の王達は恐れたり。……内に入らばや。汝は病めり。羅馬にては、汝狂しぬと人々言はむ。いざ汝、内に入らばや。

ヨカナアンの聲。エドムより来るものは誰ぞ。ゴズラより来るものは誰ぞ。其衣裳を紫に染

め、美しき衣裳を纏ひて、力強く行く、大なるものは誰ぞ。如何なれば、汝の衣裳は朱に染みたるか。

ヘロデア。内に入らばや。其人の聲音は我を狂せしむ。彼の絶えず叫べる間は、我わが女をして舞はしめざるべし。汝かやうにして彼女を見る間は、我彼女をして舞はしめざるべし。一言にして盡さば、我彼女をして舞はしめざるべし。

ヘロテ。起つなかれ、我が妻、我が妃。汝の爲めに益あらじ。我は彼女の舞ひたらむまで、決して内に入らざるべし。舞へよ、サロオメ、我が爲めに舞へ。

ヘロデア。舞ふこそなかれ、我が女。

サロオメ。いまは好し、王よ。

(サロオメ、七の面帕の舞を舞ふ。)

ヘロテ。嗚呼、稀有なるかな。稀有なるかな。汝彼女の、汝の女の、我が爲めに舞ひしを見る。近く来よ、サロオメ、近く来よ、我汝の勞に酬いむ。嗚呼。我を娛ませむとて舞

ふものに、我は大なる價を取らす。我は汝に大なる價を取らすべし。汝が魂の欲ふものは、何にてもあれ、我汝に與ふべし。汝何物をか得むとする。

サロオメ（跪座して）。我が得まほしきは、いま、銀盤に載せて……。

ヘロデア（笑ひながら）。銀盤に載せて。よし、銀盤に載せて。彼女は佳きかな。汝が銀盤に載せて得まほしき云ふは何ぞ。嗚呼、めでたく、美しきサロオメよ、汝猶太の女の誰よりも美しきサロオメよ、汝銀盤に載せて何物をか得むとする。我に言へ。何物にてもあれ、汝之を得む。我が寶は汝のものなり。サロオメよ、汝何物を得むとする。

サロオメ（起ちて）。ヨカナアンの首をこそ、ヨカナアンの。

ヘロデア。嗚呼、いしくも言へり、我が女。

ヘロデア。否。否。

ヘロデア。いしくも言へり、我が女。

ヘロデア。否。否、サロオメ。そは汝の欲ふところに非ず。汝が母の言ふところに聽かされ。

汝の母は常によからぬことを汝に勸む。願ふことなかれ。

サロオメ。我、母の言ふ處を顧るに非ず。我が銀盤に載せてヨカナアンの首を得むとするもの我自らの意に隨へるのみ。汝は誓を誓へり、ヘロデア王。汝誓を誓へる事を忘れされ、ヘロデア。我之を知る。我は我が神達によりて誓を誓ひぬ。我よく之を知る。されど願くは。サロオメ、爾餘の何物かを我に求めよ。我が王國の半ばを我に求めよ。さらば我之を與へむ。たゞ汝が唇の求めたるものを求めされ。

サロオメ。我は汝にヨカナアンの首を求む。

ヘロデア。否、否、我は汝に之を與へざるべし。

サロオメ。汝は誓を誓へり、ヘロデア王。

ヘロデア。さなり、汝は誓を誓へり。總ての人々之を聞きぬ。汝は總べての人々の前に之を誓ひしなり。

ヘロデア。平静にしてあれ、婦。我は汝と語るに非ず。

ヘロデア。我が女のヨカナアンの首を求めたるはよし。彼は誹謗をもて我を蔽ひぬ。我に對ひて言ふに忍びざることを言へり。彼女のよく其母を愛するを見るべし。讓ることなかれ、我が女よ。彼は誓を誓へり、彼は誓を誓へり。讓ることなかれ、我が女よ。彼は誓を誓へり、彼は誓を誓へり。

ヘロデア。平靜にしてあれ。我に語るな。……………サロオメ。我汝に請ふ、頑固の心を去れ。我は常に汝にやさしうしたりき。我は常に汝を愛しぬ。……………我が汝を愛するの過ぎたることもやあらむ。されば此事を我に求めざれ。此を我に求むるは恐ろしき事なり。恐るべき事なり。思ふに、必ずや戯ならむ。生々しき人の首は、見るに快きものならじ、あらずや。處女の目の斯様なるものを見むこと、似つかはしからず。汝よく何の娛むところかあるべき。何の娛むところもあるべからず。あらず、あらず、汝の欲ふところは此にあらず。我に聽け。我に綠玉あり、皇帝の寵人より贈られし、大なる圓き綠玉あり。これを通して見れば、遠方に起るころのものをも見るを得む。皇帝はその闘技場に臨む時、此の如き綠玉を携ふ。されど我が綠玉は更に大なり。我はよく其更

に大なるを知る。世に是より大なる綠玉はなし。それを汝に取りせむ、汝に取りすべきか。それを我に求めよ、我そを汝に與へむ。

サロオメ。我はヨカナアンの首を要求す。

ヘロデア。汝我に聽かざるなり。我に聽かざるなり。我が語るを許せ、サロオメ。

サロオメ。我はヨカナアンの首を要求す。

ヘロデア。否、否、汝そを得むと欲ふことなかれ。汝、我が今宵汝を見て、見ることを休めざりし故に、たゞ我を惱まさむとてしもかくは言ふか。眞に今宵我汝を見て、見ることを休めざりき。汝の美しきに惱まされぬ。汝の美しきに痛く惱まされて、我が汝を見ることの過ぎしなり。されど、我復汝を見ることなからむ。人は何物をも見るべからず。人は物をも人をも見るべからず。たゞ、たゞ、鏡に對ひて見るのみぞよき。鏡の示すところは假面に過ぎざればなり。嗚呼、嗚呼、酒を齎し來れ。我は渴く……………サロオメ、サロオメ、我等互に友ならなむ。汝よく之を想へ……………嗚呼、我何を

か言ふべき。言ふべかりしは何ぞ。嗚呼我想起しぬ。……サロオメよ——いざ我に
 近く來よ。恐らくは、汝我が言葉を聞かずしてあらむことを。——サロオメよ、汝は
 我が白き孔雀を知る。挑金嬢の樹さ、高き扁柏の樹との間を歩む、我が美しき、白き
 孔雀を知る。其嘴は金をもて鍍られ、其食ふところの穀粒は金をもて塗られ、其足は
 紫に染められたり。彼等の啼くときは雨來り、彼等その尾を擴ぐる時は月天に顯はる。
 いづれも雌雄相並びて扁柏の樹さ、黒き挑金嬢の樹との間を歩み、各之に仕ふべき奴
 隷を隨へたり。時には彼等樹木を横ざりて飛び、やがてまた草澤の間に伏す。世にか
 ばかり希しき鳥はなし。我は皇帝を以つてして尙ほ我が鳥の如く美しき鳥なきことを
 知る。我は汝に我が孔雀の五十を與へむ。彼等は何處にてもあれ、汝の行くところに
 従ふべし。而して彼等の中において、汝は、大なる白き雲の中なる月の如くなるべし。
 ……我は總べて彼等を汝に與へむ。我に一百のあるのみなり。世に我が孔雀の如
 き孔雀を有てる王はなし。されど、我は總べて彼等を汝に與へむ。ただ汝、我が誓より

我を釋さざるべからず、汝の唇の我に求めしところのものを我に求むべからず。(彼酒
 の盃を空うす。)

サロオメ。我にヨカナアンの首を與へよ。

ヘロオメ。いしくも言へり、我が女。汝にありては、汝の孔雀こそ可笑しけれ。

ヘロデ。嗚呼、汝は我に聽かざるなり。心を平にせよ。我にありては、心平にあらずや。

我は全く心平なり。聽け。我は此處に隠されたる寶玉を有つ。——汝の母も未だ曾つ
 て見しことなき寶玉、見て驚くべき寶玉なり。我は四列に綴りし眞珠の頸圈を有つ。
 銀線もて勝りし月に似たり。金の網に繋ぎし五十の月にも似たり。女王の象牙の胸に
 かけられぬ。汝そを帶ぶる時、女王の如く美しからむ。我は二種の紫石英を有つ。一
 は酒の如く黒し、いま一は水をもて淡くされし酒の如く赤し。我は虎の目の如く黄な
 る黄玉さ、山鳩の目の如き石竹色の黄玉さ、また猫の目の如く緑の黄玉さを有つ。我
 は氷の如く冷き焰をもて常に燃ゆる蛋白石、人の心を悲ましむる、また物の影を恐る

蛋白石を有つ。我は死にし婦の瞳の如き縞瑪瑙を有つ。月の變るにつれて變り、日
 を見る時に蒼白む月光石を有つ。我は卵の如く大なる、また青き花の如く青き青玉
 を有つ。海は其中に彷徨し、月來りて其波の青きを擾すことなし。我は貴撤攪石、
 綠柱石、綠玉髓、また紅寶石を有つ。我は紅縞瑪瑙、風信子石、玉髓石を
 有つ。而して我、此等の總べてを、總べてを汝に與へむ、尙ほ他の物をも之れに添
 へむ。印度の王は恰かも今、鸚鵡の羽より工夫されし四の扇を、又ミテアの王は
 駝鳥の羽の衣裳を贈りぬ。我は女の見るべからざる、若き男の見る前に、鞭もて打た
 るゝ云ふ結晶體を有つ。我は螺鈿の匣に三の稀しき土耳其玉を有つ。其額に之を着
 する人は、現實になきものを想像するを得、其手に之を携ふる人は、子を生む婦をし
 て、子を生まぬ婦たらしむるを得。此等は實に、價を知らぬ大なる寶なり。されど尙
 ほ此に止まらず。黒檀の匣に、我は黄金の林檎に似たる、琥珀の二の盃を有つ。敵若
 し此等の盃に毒を注がば、銀の林檎の如くなる。琥珀もて覆はれし匣に、我は玻璃も

て覆はれし屍を有つ。我はセレスの地より齎されし外套、紅玉並びにユウフラテッ
 の市より來れる硬石もて飾られし腕環を有つ。……此より他に、尙ほ何をか求むる、
 サロオメよ。汝の欲ふものを我に告げよ、我之を汝に與へむ。唯だ一のものを外にし
 て、汝の求むる總べてを我汝に與へむ。たゞある一人の命を外にして、我が有てる總
 べてを我汝に與へむ。我は高僧の外套を汝に與へむ。聖堂の帳を汝に與へむ。

猶太人共。嗚呼、嗚呼。

サロオメ。我にヨカナアンの首を與へよ。

ヘロデ。(其椅子の後に靠れながら)。彼女をして其求むるころのものを與へられしめよ。

眞に彼女は、其母の兒なりけり。(第一の兵卒近づく。ヘロデアは王の手より死の指環
 を取りて兵卒に渡す。兵卒直にそを死刑執行者のところへ持ち行く。執行者は恐怖の状
 なり。我が指環を取りしは誰ぞ。我が右の手に指環ありき。我が酒を飲みしは誰ぞ。我
 が盃に酒ありき。そは酒に充ちたりき。何者か之を飲みぬ。嗚呼、たしかに、何者か

の悪しき意志、何者の上にか起りたり。(死刑執行者古井戸へ降り行く。)嗚呼。如何なれば我、誓を立てしぞ。今より後、また王者をして誓を立てしめざれ。彼若し誓を守らざれば恐るべし。彼よし誓を守ることも、亦ひさしく恐るべし。

ヘロデア。我が女むすめいしくもなせり。

ヘロデア。必ずや、何等かの禍起るべし。

サロオメ。(古井戸の上に身を乗り出で、傾聴す)。何の音もなし。何物をも聞かず。など彼は叫ばざる、此人は。嗚呼、もし人ありて我を殺さむとせば、我は叫ぶべし、我は争ふべし。我は忍ばざるべし、我は……打て、打て、ナアマンよ打て、我汝に告ぐ。

……さなり、我何物をも聞かず。静寂なり、恐ろしき静寂なり。嗚呼、何物か地に落ちたり、我何物かの落つるを聞きぬ。あれは首斬役の劔なり。此奴隷は恐れたり。懦夫なり、此奴隷は。更に兵卒を遣はせよ。(姫はヘロデアの侍従を見て、彼に話しかく。)彼處に行け。汝は死にし人の友なりき。友ならざりしか。さて我汝に告ぐ、死

にし人の數未だ足らざるなり。兵卒に行き、彼等をして我が求むるところのもの、王の我に約せしもの、我が有てるものを取り來らしめよ。(侍従退く。サロオメは兵卒の方へ向ひて言ふ。)いざや此方へ、兵卒等よ。汝等此井戸に下り行き、此人の首を我に齎せ。王よ、王、汝の兵卒等の、我にヨカナアンの首を齎さむことを命ぜよ。

(大なる黒き腕、死刑執行者の腕、井戸より現はれ來る、ヨカナアンの首は銀の盾に載せられたり。サロオメ之を受く。ヘロデアは其上衣うはぎの袖をもて面おもてを蔽ふ。ヘロデアは微笑みながら自ら扇ぐ。ナザレ人等は跪ひざまづきて祈禱をはじむ。)

嗚呼、汝我が汝の口に接吻きすするを許さざりき。よし、今は我之を接吻せむ。人の熟したる果くだものを噛むごとく、我は我が齒をもて之を噛まむ。さなり、我汝が口に接吻せむ。ヨカナアン。我之を言へり、言はざりしか。我之を言へり。嗚呼、我今は之に接吻せむ。……さはれ。など汝は我を見ざるや、ヨカナアン。かれが如く恐ろしかりし汝の目、かれが如く憤怒と侮辱とに充てりし汝の目も、今は閉ぢたり。如何なれば閉ぢたるや。

汝の目を開け。汝の眼瞼を揚げ、ヨカナアン。如何なれば汝我を見ざるや。汝我を見ざるは、我を恐るゝか。……而して毒を吐く赤き蛇の如かりし汝の舌は、已に動かす、一語を漏らさず、我が上に其惡毒を吐き掛けし紅き毒蛇は。不思議なり。不思議ならずや。如何なれば赤き毒蛇のつひにまた動かすなりし……。汝我に欲ふところなかりき。汝は我を斥けき。汝は我に就きて惡しき言を放ちき。汝は娼婦に對ふ如く、淫逸の婦に對ふ如く我に對ひき、我、猶太の姫、ヘロディアの女、サロオメに對ひき。偕て我は尙ほ生きたれど、汝は死したり、汝の首は我がものなり。我は之を心の儘になす事を得。我は之を大に投げ、空の鳥に投ぐる事を得。犬の棄つるところのものは、空の鳥來りて之を喰ひ盡さむ。……嗚呼ヨカナアン、汝は我が人の中に愛せし一人の人なり。他の總べての人は、我に厭はしかりき。されど汝は美しかりしよ。汝の體は銀の礎の上に置かれし象牙の柱なりき。銀の鳩と百合さに充てる苑なりき。象牙の盾をもて覆はれし銀の塔なりき。世に汝が體の如く白きものはなかりき。

世に汝が髪かみの如く黒きものはなかりき。世に汝が口の如く紅きものはなかりき。汝の聲は、稀めづしき匂におを撒く香爐かまどの如く、我汝を見たる時、我は希めづしき音樂を聞けり。嗚呼など汝は我を見ざりしや、ヨカナアン。汝の手をもて、汝の誹謗ひぼうをもて、汝は其面を隠しき。汝はかの、その神を見るべかりし者の被覆おほいものを汝の目の上に置きぬ。さて汝は汝の神を見たり、ヨカナアンよ。されど我を、汝は竟に我を見ざりき。汝若し我を見たらむには、我を愛したるべし。我は汝を見き。嗚呼、如何に我汝を愛したるかな。我は尙ほ汝を愛す。……ヨカナカンよ、我はたゞ汝を愛す。……我は汝の美に渴かほく。我は汝の體に饑うふたり。葡萄酒もまた林檎も我が欲やほを和やはらする事能はず。我は如何にかなすべき、ヨカナアン。洪水もまた大海も我が情熱の火を消す事能はず。我は王の家に生れき。しかして汝我を蔑あがしるにしき。我は童貞どうせいなりき。しかして汝我が童貞の操まを奪へり。我は純潔じゆんけつなりき。しかして汝我が脈管みやくわんに火を注げり。……嗚呼、嗚呼、如何なれば汝我を見ざりしか。汝若し我を見たらむには、我を愛したるべし。

よく我は知る、汝の我を愛したるべきを。げに愛の不可思議は、死の不可思議よりも大なり。

ヘロデア。彼女こそは、汝が女むすめこそは不敵なれ。實に彼女こそは不敵なれ。彼女の行へるは罪ぞ。大なる罪、知られざる神に對する罪ぞ。

ヘロデア。我が女の行へるところは我が意こころに適かなふ。彼女はいしくも行へり。されば我今はこゝに止まるべし。

ヘロデア。(起ちて。嗚呼。我が兄の妻は物言へり。いざ、我は此處を去らむ。いざ、いざ。何等かの恐ろしき事たしかに起るべし。マナツセエよ、イツサカルよ、オシアスよ、炬たいまつ火を消せ。我物を見じ、物に見らるゝこゝをせじ。炬火を消せ。月を隠せよ。星を隠せよ。我等王宮に潜みてあらむ、ヘロデアよ。我は恐しく思ひはじめぬ。

(奴隸ども炬火を消す。星消ゆ。大なる雲月を横ぎり、それを包み去る。舞臺全く暗し。王は段階きざしを降り始めぬ。)

サロオメの聲。嗚呼。我は汝の口に接吻きすしぬ、ヨカナアン、我は汝の口に接吻しぬ。汝の唇には苦き味あじありき。血の味なりしか。……否。むしろ、恐らくは愛の味なりけむ。

……人は言ふ、愛には苦き味ありき。……されど亦何の間ふところぞ、何の間ふところぞ。ヨカナアンよ、我は汝の口に接吻しぬ。

(一道の月光サロオメの上に落ちて彼女を照らす。)

ヘロデア。(振り返りてサロオメを見ながら)。其婦をんなを殺せよ。

(兵卒等突き進み、其盾をもて、猶太の王女、ヘロデアの女むすめ、サロオメを壓し殺す。)

幕

悲劇サロオメ 終

大正三年十月三十日印刷
大正三年十月二日發行

(定價十錢)

著者 生田長江

發行者 植竹喜四郎

印刷者 成田滿

印刷所 公木社



發行所

東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三●電話下谷三四一九

植竹書院

東京市神田區飯田町二丁目六十八番地

植竹文庫第一編 本文庫は世界的の名著中、雄編大作のみを収め之を六號活字にて縮刷す

新刊 縮刷 サニン 全譯 上下 武林無想庵譯 定價九十錢 (郵稅八錢)

■讀賣新聞評・アルツイバシエヴの傑作サニンの翻譯である、原著者が多年心血を絞り得たこの勞作の効果が惜しくも露文壇に於て、發賣禁止の厄に逢つた程人間の自然の性情性慾を忌憚なく描破し盡した一代の傑作たることは今更めかしくいふまでもないが、今無想庵氏の翻譯によつてこの傑作が日本の文壇に移植されたことは慶賀すべきことである。氏の譯此の機微の消息を遺憾なく流露し得てその内容よく生効しきながら原作の情調に摘する觀がある。

内容の豊富と價格の低廉 本書は全六號活字にて一頁壹千字乃ち菊版二頁に匹敵する内容を有す。故に廉價なる事、吾が文明叢書を除きて本文庫に優るものなし。

森田草 平氏著 縮刷 小 煤 煙 四卷 八版 定價九十錢 郵稅八錢

特製定價 壹圓六十錢 郵稅八錢

特製(六版中二) 上等畫布製の表紙に二青年畫家が一冊づゝ得意の肉筆を揮ひ。著者草平先生が扉に題號、姓名、番號を一々揮毫せしもの(殘本僅少)

鈴木三重 吉氏著 縮刷 珊瑚樹 新刊 三重吉傑作選集

内容 一枚の瓦 お三津さん 赤い鳥 桐の雨 黒血 今迄に著した十數冊の小説集の中から、著者自身に最も氣に入つた作物ばかり選り集めて縮刷したもので、皆當時の文壇に傑作として好評されたものばかりです。 津田青楓氏裝幀 煤煙同型、美本 六號活字組、四百餘頁 一頁七百卅餘字詰 定價 九十五錢 郵稅 八錢

百科
精英
文明叢書

ポケット形、一篇百頁
全六號活字 一頁四百
字より七百字に至る

理想の叢書出版

●定價 壹編に付き 拾錢 郵税二錢

叢書中決闘の如く一冊二篇を包有するものは廿錢、飛行機の如く一冊三篇を有するものは卅錢となる

文學、宗教、歴史、科學、哲學のあらゆる方面に涉りて、世界文明の代表作物を的確に、廉價に讀者に紹介する **世界圖書館**

■内容精選

書籍の價値は實に在り。乃ち本叢書は内容の選擇に就て全力を擧げて執筆者に現代の大家及び新進の精英を網羅す

■低廉無比

一篇百頁内に原稿紙百枚乃至二百枚を有して定價僅かに十錢なるを以て一枚の價實に一厘或は五毛となる是を他の普通の圖書の定價に比較する時は三分一或は四分の一の廉價となる

文明叢書

第一編	カイゼル	福本日南著
第二編	サロオメ	ワイルド作 生田長江譯
第三編	決闘	チエホフ作 小山内薫譯
第四編	マダ	ゾーデルマン作 藤澤古雪譯
第五編	グダ	ハウプトマン作 秦 豊 吉譯
第六編	馭者ヘンシエル	鈴木三重吉作
第七編	朝顔	
第八編	戀を知る頃	谷崎潤一郎著
第九編		
第十編		

明文叢書

第十一編
第十二編
第十三編

飛行機

廣部工學博士序
德永理學博士著
早大工學士著

第十四編

ラジウム講話

ソチイ教授著
永代靜雄譯

自第十五編
至第十九編

古城の秘密

モールス著
岡村千秋譯

自第二十編
至第二十三編

ドリアン・グレー

ワイルド作
佐藤春夫譯

第二十四編

心中未遂

正宗白鳥著

第二十五編

ぼんち

岩野泡鳴著

第二十六編
第二十七編

露西亞印象記

ブランデス作
中澤臨川譯

明文叢書

第二十八編

全キ

ツス

チエホフ作
廣津和郎譯

第二十九編

六

月

相馬泰三著

第三十編

踊

森田草平著

第三十一編

樂

園

田山花袋著

第三十二編

四

十

女

徳田秋聲著

第三十三編

山

吹の

花

田村俊子著

第三十四編

桐

屋

後藤末雄著

278
3

文 明 叢 書

第三十五編 全譯 夕	第三十七編 全譯 獄 中 記	第三十八編 全譯 ウ井ルヘルム・テル	第四十編 全譯 戀愛と道德	第一編 血 笑 記	第二編 全譯 父	第三編 全譯 阿片溺愛者の告白	第四編 全譯 阿片溺愛者の告白
アナトール・ス 谷崎精二譯	オスカール・作 廣津和郎譯	シムル重信譯 舟木重信譯	エレン・ケー作 金子筑水共譯 田制佐重	アンドレーフ作 尾瀨哀歌譯	ストリンドベルヒ作 橋田東聲譯	デクキンシイ作 辻潤譯	デクキンシイ作 辻潤譯

終

